



2024.12.20 No. 44

HAKUA TSUSHIN

岩手県立盛岡第一高等学校白聖同窓会事務局

目次

- p.4… 同窓会だより
- p.5… 特集1「4代目白聖城に後輩たちへの思いを込めて」
- p.6… 設立百周年記念講演
- p.8… 特集2「新しい治療法の確立を目指して」
- p.11… 海外派遣「白聖の翼」報告



白聖同窓会百周年



式辞

松葉一針一針に、祝うが如く瑞雨滴る本日、白聖同窓会設立百周年記念式典が、盛大に開催できます慶びを共に分かち合いたいと存じます。

また、本日は、ご多忙の折、昭和五十八年卒の達増知事にもご臨席を頂き誠に光栄に存じ、深く感謝申し上げます。

我が同窓会は大正十三年九月、一九二四年、名簿作成のための有機的結合に始まるものとされます。その後、盛岡中学同窓会の名称で、毎年会員名簿を発行し続けてまいりました。戦争による中断を経て、昭和五年、一九五十年、創立七十周年を機に、その名称を白聖同窓会に改称し今日に至っているであります。

これまでの会員数は本校、雲石分校、定時制及び通信制を含め三万八千人余であります。各会員は広く社会の各分野において、なべてその存在感を遺憾なく発揮していることと存じ、誠に喜ばしく、誇りに思う次第です。

主な事業を振り返ると、当初の名簿作成及び基金募集に始まり、周年記念事業として、学校農園地の取得や第二グラウンドを整備し、百周年には白聖記念館を建設することも、生徒の海外派遣事業、即ち「白聖の翼」などを開始し、その後は屋内投球練習場や弓道場の整備など、一貫して母校の施設の整備支援に取り組みとともに、後輩諸君の部活動の支援はもちろんのこと、甲子園出場時の寄付募集などの主体として活動することに加え、東日本大震災被害生徒への援助など、同窓生の力を結集して、有形無形の様々な支援に取り組んできたことはご承知のとおりであります。

熱心に取り組んでこられた先人はじめすべての会員の母校への熱き思いと意欲的な取組みを、心から讃えるとともに深く敬意を表したいと存じます。

また、わが同窓会活動を支えてこられた事務局の方々にも敬意を表したいと存じます。

これまで事務局として多忙な勤務にありながらも、陰ひなたなくご尽力されてきた歴代の諸先生方の存在と、ひた

すらに事務局の仕事に献身されてこられた職員がいてこそ、我が同窓会の今日の堅固な礎が築かれ、様々な活動を続けてこられたのであります。

改めて関係各位に心から感謝したいと存じます。

そして、札幌白聖会や在京白聖会をはじめとする各地の白聖会、盛岡市役所白聖会などの職場毎の白聖会、硬式野球部等、部のOB、OGからなる白聖会など四十八もの白聖会、並びに十五日会などの名称での卒業年次毎の多くの同期会は、我が同窓会と軌を一にし、それらにおける交流の活発化は同窓会活動の大きな力となるものであります。関係各位に心から感謝し、引き続きの連帯をお願いするものです。

ところで、我が同窓会は百周年という節目を迎えました。時代を超えても変わらぬもの、即ち不変なるものをあげるとするならば、先ずは、会員の母校発展に寄与したいという個人的な利書を超えた自発的な意思であります。誰もが体験した白聖城での青春の日々の記憶が母校への思いとなり、その思いがかかる意思へとつながったものと思えます。

そして、在校生として支援を受けた後輩がその後、先輩即ち同窓生として後輩と母校を支援していく、まさに白聖会なりの白聖会的「共助」という仕組みの継承があります。その継承においては、同窓生がそれぞれの立場で強みを活かし、惜しみなく力として傾注することで同窓会全体としての確かなる力の最大化を図ってきたものと存じます。

今後とも、我が同窓会の不変なるものを共有し、会員の自発的意思に沿って、この良き美德ともいうべき仕組みを継承してまいらるべきものと存じます。

そのために、同窓会としましては、先輩、後輩分け隔てなく誰もが気軽に参加できる交流の更なる広がり一層の深まりの創出に努めてまいります。

同窓生諸兄諸姉の一層のご理解と絶大なご協力をお願い申し上げます。

結びになりますが、後輩生徒諸君の伸びやかな成長と力強い躍進、並びに百四十四周年を迎えた母校の更なる発展を心から祈念し、式辞といたします。

令和六年十月十九日

白聖同窓会会長 昭和四十五年卒 藤尾善一



ローカルこそがグローバル

白聖同窓会会長 中村 一郎 (昭和 49 年卒)

同窓会会員の皆さんにはお元気にご活躍のこととお喜び申し上げます。

同窓会設立 100 周年という節目にあたる本年 10 月に開催された総会において、藤尾善一前会長から会長のバトンを引き継いだ中村一郎です。

今年の総会は多くの同窓生の皆さんの参加をいただき、盛会裏に開催することができました。運営に尽力いただいた担当年次の平成 10 年卒の皆さんには、心から感謝申し上げます。

私は、大学卒業後、岩手県庁に入庁、県を退職後に三陸鉄道(株)で社長を務め、令和 4 年から盛岡市副市長を務めております。

昨年、ニューヨーク・タイムズ紙で「2023 年に行くべき 52 カ所」の一つに盛岡市が選ばれましたが、盛岡市をニューヨーク・タイムズ紙に推薦してくれたのが、クレイグ・モドさん。彼は日本在住 20 年以上となるアメリカ出身の作家、旅行家で、盛岡に来られた際に、話を伺う機会がありました。

モドさんは、これまで日本中の 1 万キロを超える距離を自分の足で歩き、地域を見つめ、土地の人の話を伺ってきたとのことでした。

盛岡については、「東京から新幹線で 2 時間余り、山々に囲まれ、街歩きにとっても適している。大正時代に建てられた西洋と東洋の建

築美が融合した建造物、近代的なホテル、歴史を感じさせる旅館、蛇行して流れる川など素材にあふれている。城跡が公園になっているのも魅力の一つ。盛岡は「隠れた宝石」のような街…」と紹介しています。

また、盛岡は、若い人たちがお店を開業したりなど、頑張っている若者が多いとも言っています。外の人たちに盛岡の良さや特徴を教えてください、私たち地元の人たちがこれまで当たり前のように思ってきたことの大切さを改めて考えるいい機会にもなりました。

「盛岡らしさ」は、人によってそれぞれかもしれませんが、ただ、他の都市と同じような街をつくっていくだけでは、街の魅力は生まれてこない。その土地の自然や歴史、文化などを踏まえ、いいものはしっかり残し、またそれを生かしながら、その上に新たなものを作り上げていく。そのことが、今後ますます求められていくのではないのでしょうか。ローカルなものこそがグローバルに評価される時代だと思います。

100 周年を迎えた我が同窓会ですが、「良き伝統」はしっかり守りつつ、新たなことにも果敢に挑戦する気概を持って、今後とも、現役生の活動支援や母校の発展のための活動に努めて参りますので、皆様の一層の御支援と御協力をお願い申し上げます。



白聖同窓会 100 周年を迎えて

校長 高橋 一佳 (昭和 58 年卒)

同窓生の皆様には日頃より本校の教育活動にご理解、ご支援を賜っておりますことに心より感謝申し上げます。

また、今年度、白聖同窓会が設立 100 周年を迎えられたことをお祝い申し上げますとともに、100 年の歴史と実績を築いてこられた同窓生の皆様に深く敬意を表する次第です。

白聖同窓会の皆様による本校へのご支援は数々ございますが、その中でも本校創立 100 周年記念事業の一環として開始された生徒海外派遣事業は、昭和・平成・令和と時代を超えて受け継がれております。昭和 55 年 (1980 年) に始まった本事業は、派遣先の変転はあるものの、令和 5 年度の派遣で 45 回、派遣生徒数は 481 名ののぼり、派遣生は、国内はもとより国際的にも様々分野で活躍しておられます。今年度も、10 名の生徒をカナダのビクトリア市に派遣すべく準備が進められております。

学校の施設設備に関しても、創立 100 周年の昭和 55 年には白聖記念館が竣工、平成 13 年には屋内投球練習場竣工、平成 16 年にグラウンド夜間照明竣工、平成 22 年に弓道場竣工と続きます。そして、最近では、本校卒業 50 周年記念という趣旨で、遮光カーテンや白聖ホールの舞台幕、バックボード等の備品をご寄贈いただくことも増えてまいりました。学校生活、部活動を支える施設設備の充実は、同窓会の皆様のご支援なくしては実現しえなかったものです。生徒諸君は、皆様からご支援いただいた環境の中で、白聖の先人・諸先輩の足跡に誇り

を持ち、校訓である「忠実自彊」「質実剛健」を礎としながら、自主的・主体的に行動し、文武両面に生き生きと充実した高校生活を送っております。

今年の 9 月、某放送局の「鶴瓶の家族に乾杯」という番組をご覧になった方も多いと思います。鶴瓶さんが本校においてになったのは、本当に突然のことでした。事前の準備や打合せなど何もないまま、鶴瓶さんのご要望にお応えして応援団長が振る M 旗のもと、部活動をしていた数十人の有志生徒が校歌を披露し、エールを送ることとなりました。コロナ禍を経て多くの学校では応援団活動が停滞していますが、大きな声で堂々と校歌を歌う本校の生徒の姿を見て、コロナ禍を乗り越えて大切なものが受け継がれていると感じました。

学校行事のあり方や施設設備、生徒の気質は、時代と共に少しずつ変化してきていますが、応援歌練習・運動会といった一連の行事や学校生活を磨き抜けることを通じて「一高精神」というものが、意図しないままに共有され、受け継がれていると言えるのではないのでしょうか。

これからも生徒が主体的に活躍する場を大切に、「広く社会に貢献する人間」に成長していける学校であり続けたいと考えています。白聖同窓会の皆様には、今後とも、本校の生徒諸君に対しまして、力強いエールを贈っていただきますようお願い申し上げます。

総会報告

平成10年卒年次代表 松田俊記

令和6年10月19日(土)白聖同窓会総会(母校創立144周年)がメトロポリタン盛岡本館にて開催されました。通常ならば幹事学年による講演がありますが、今年度は同窓会設立百周年記念という事で、鳥取大学瀬戸邦弘准教授による「心援団と自校文化の形成過程」という特別講演が開催されました。詳しい内容は別途記載。会場では、限定日本酒セット、オリジナル手拭い、記念ロゴ入り飲料セット、記念ロゴ入りコースター、在校生による企画塗り校章など、百周年記念を盛り上げていただきました。若い世代も多く参加し昨年より50名ほど多い177名の出席者でした。なお全体司会

は、工藤明さんが務めました。総会議長は松田と鈴木真吾さんが務め、同窓会活動と在校生の報告がされました。文武両道を旨とする一高らしく、運動、文化部双方とも素晴らしい成績を残しております。今年度より始まったコンビニ等による会費納入は、利便性の向上が好評を得ておりますが思ったほどの人数増加にはつながらなかったため、今後も周知を促していくことの確認を行いました。昨今の印刷費、輸送費高騰に対応していくため、この「白聖通信44号」に広告掲載を試験的に実施されることになりました。そして役員改選があり、会長の藤尾善一さんが退任され新たに中村一郎さんが新会長に承認されました。総会後の記念式典では達増知事から祝辞をいただき、白聖同窓会事務局に長年勤務していただいている吉田美保子さんに感謝状の贈呈も行いました。記念講演を熱心に聞き入る姿に、皆さん応援に対する熱い気持ちを今でも持ち続けているのを感じました。



入った校歌を高らかに斉唱し、終了しました。終了後には、学年の15年ぶりの同窓会を開催しました。卒業後26年たちまちが49名もの参加があり恩師も5名集まっていたいただき、久しぶりの旧交を温めました。社会に出てからの友人とひと味違う一高学友の大切さを改めて感じる貴重な時間になりました。最後に、準備にご尽力いただきました同窓会事務局の皆様へ感謝すると共に、同窓会及び母校盛岡一高のますますの発展を祈念し報告いたします。

令和6年度白聖同窓会役員

Table listing the board members of the White Saint Alumni Association for the 6th year of Reiwa. It includes positions like Chairman, Vice Chairman, and various committee members, along with their names and graduation years.

令和6年度白聖同窓会一般会計予算

Income and expenditure budget table for the 6th year of Reiwa. It details various income sources like membership fees and donations, and expenditure items like administrative costs and event expenses.

令和5年度白聖同窓会一般会計決算

Income and expenditure final account table for the 5th year of Reiwa. It compares budgeted amounts with actual results, showing a surplus of 339,738 yen.

Detailed expenditure table for the 6th year of Reiwa, listing specific items like office supplies, travel, and printing costs with their respective budget and actual amounts.

Detailed expenditure table for the 5th year of Reiwa, listing specific items like office supplies, travel, and printing costs with their respective budget and actual amounts.

同窓会だより

来しかた50年この先50年

年次代表者 佐々木和延 (昭和49年卒)

令和6年8月12日に恒例の昭和49年卒の同級会が開催されました。この同級会は日時も開催場所も固定されており、コロナ期を除き50年間継続して開催されています。何故継続して集まるのか？自問すると答えは簡単、楽しいからです。おおよそ顔ぶれが変わらず、徐々に参加者が増え続けていることからわかります。この先50年は無理でも幹事が存命する限り継続してほしいと私は願っていますし、参加者の思いも同様でしょう。

今年は卒後50周年ということで雨台風が直撃したにもかかわらず、東日本大震災直後以来の大盛況となりました。幹事の発案で参加者一人一人の近況報告を受け付け順にビデオ撮影し、集合CDとして残し、併せて同級生の現役歌手高橋研さんのミニコンサートも開催されました。同氏は自分が一番若いつもりらしく「まるで老人ホームを慰問しているようだ」と楽しい冗談を飛ばしていました。

当日の台風は沿岸・東北が特に大雨で、「実家まではたどり着いたが、盛岡には足がなくて行けない。テレビの台風報道で家族に反対された(富山在住者)」など盛岡から遠く県内各地に故郷を持つ自彊寮の同僚達からドタキャンの知らせが相次ぎ、寮生同期2次会を企画した身としては恨めしいものとなりました。

また、50周年記念寄付事業には幹事の予想を上回る賛同者が集まり、当日は高橋校長先生にもご来場いただいて、記念品目録を贈呈することが出来ました。ちなみに可動式バックボード一式と特別教室遮光カーテンと白聖ホール舞台一式の3点です。

記念品選定は、盛岡一高は学年によって特徴が異なります。私は自彊寮に在籍していたので前後合わせて5年の学年を知ることができました。例えば、最後の松尾鉱山中学校出身の先輩や2mを越す積雪の湯田中学校出身の後輩など、方言や地域性の違いにも驚いた記憶があります。その自彊寮は令和2年3月



31日をもって124年の歴史に幕を閉じました。少子化等で各地の学校の統廃合が進んでますが、「母校を失う」ということは、こういう寂しさなのか」という感情が交錯するのは寮生の中で私一人ではないと思います。毎回冒頭に故人の報告と黙とうがありますが、いずれ来年の8月12日も、その先の8月12日も体の続く限り私は継続して49年会の同級会には出席したいと思っています。

卒業30周年を迎えて

年次代表者 山田隆 (平成6年卒)

去る令和6年8月11日(日)、我々平成6年卒は、母校卒業30周年を記念し、同窓会を開催致しました。現役バリバリの49歳、50歳ということもあり、仕事に、家庭に忙しい中、同窓生68名に参加して頂き、更に当時ご担任でお世話になりました先生方5名にもご臨席賜り、総勢73名で同窓会を開催致しました。遠くはインドから駆けつけた同窓もおられ、グローバルに活躍する白聖を垣間見ました。また、当日は、宮崎県沖での地震や台風5号の影響もあり、当初参加する予定だった同窓が急遽参加することが出来ず、改めて自然がもたらす災害において人間は無力であると感ずずにはいられない状況でありました。

我々、平成6年卒は、2006年(卒後12年目)に第1回の同窓会を開催、2018年(卒後24年目)、白聖同窓会幹事年度に同日開催で第2回の同窓会を開催して参りました。そんな中、前回発行された白聖通信No.43号に、平成5年卒が卒後30年を迎えたという記事を拝見し、2024年の今年は、我々がその歳にあたることを確認。在盛の同窓生有志と相談の上、卒業30周年の同窓会を開催しようという運びになりました。

同窓会当日の様子は、卒業以来会う同窓、もしかすると在校時も話をしたことがない同窓も相まって、初めはぎこちないところもありましたが、お酒が入ればみんなが饒舌となり、旧交を深めることが出来ました。また、米澤俊英先生、早坂八郎先生、遠藤洋一先生、千葉研二先生、吉田元先生にご挨拶を頂戴し、非常に懐かしく、当時の授業風景を思い出すような、ウイットに富んだ貴重なお話を享受することが出来ました。最後は、当時の応援委員3人のリードにより、校歌斉唱をし、改めて母校の校歌は素晴らしいなと余韻を感じながら、同窓会を締めくくることが出来ました。

今回卒業30周年の同窓会を開催するにあたり、今どきかもしれませんが、LINEや



FacebookのようなSNSを通じての周知、Googleフォームを利用した出欠の集計、PassMarketを利用した会費の事前徴収と、使えるWEB上のプラットフォームを駆使し、事務局の負担を軽減しました。白聖同窓会本体としては難しいかもしれませんが、年次の同窓会によっては今後取り入れてもよいものだと感じました。特に私達と年が近い現役世代の年度の白聖では同窓会が開催されていないとか、このようなものを利用すると、事務局負担が軽減でき同窓会開催を可能にするかもしれません。

平成6年卒業生一同、現在の自分達があるのは母校での学びのおかげであると感じております。母校及び白聖同窓会の益々のご発展、そして白聖の皆様のご多幸と健勝を心から祈念しております。

特集
1

4代目白聖城に後輩たちへの思いを込めて

真っ白な外壁の5階建ての校舎。昇降口のドアを開け、左を見上げると九谷焼陶板に描かれた「白聖城三遷(昭和10年卒 福田 隆氏)」で代々の校舎の面影を知ることができます。正面のホールには「鳩もつ少年(昭和6年卒 舟越 保武氏)」。グラウンドが一望できる吹き抜けのこの空間は、光が差し込み、木のぬくもりを感じる場所です。

創立120周年(平成12年)に入学した私たちは、現校舎で3年間を過ごした最初の学年です。白聖同窓会設立100周年という節目の令和6年。白聖記念館や現校舎の設計を担当された小川惇氏にお話を伺いました。



おがわ まこと
小川 惇氏(昭和26年卒)

本校卒業後、明治大学理工学部建設学科へ進学。一級建築士として県内外で活躍。陸前高田市「奇跡の一本松」と共に希望の象徴の遺構として残されている「陸前高田ユースホステル(1969年開所)」の設計を手掛けた。また、白聖同窓生の一人として、盛岡一高創立100周年の際の白聖記念館や、現校舎の設計にも携わった。現在は(株)久慈設計の顧問として若手社員を育成し、会社を支える。

白聖同窓生として現校舎「4代目白聖城」設計に込めた思い、思い出

現校舎は平成8年設計、同9年着工、同11年12月に完成。「これまでにない校舎をつくりたいと思っていました。校舎のイメージは、瞬間的にパッと浮かびました。」「建設時に大切にしていることは、周囲の建物や環境との調和。その土地の歴史や風土をベースにデザインしています。」と小川氏は話します。当時、県内初となる5階建ての校舎には、小川氏のこだわりが随所に見受けられます。

正門をくぐると、正面には昇降口。見上げると大庇が設けられていることに気がきます。天に広く開かれた大庇。これは「将来に羽ばたく若き一高生」を象徴したもので、小川氏が後輩たちに込めた思いそのものです。

一高と言えば、天文台も特徴の一つ。しかし設計時に大きな問題が起こったと小川氏は話します。「基本設計がまとまり、県に伺いを立てたところ、『(当時)天文台は県立高校には設けられないことになっている。歴史ある盛岡一高と言えど、計画から外すように』とのこと。これは大変なことになったと困惑しました。学校側と協議を重ね、また様々な分野で活躍する盛岡一高出身の方々の協力を得て、旧校舎(3代目)にも天文台が設置されていたという既得権を行使することで、新校舎に一段と高い天文台を設けることができました。私が手掛けた中でも思い入れが強い部分です。」と語ります。

「それまでの学校には見られないデザインや機能性ある校舎に」という考えは、白聖ホール、階段教室、第二体育館棟などにも表れています。大きな窓から上田界隈を見渡せる白聖ホールは、地域の方などをお呼びする講演や、一高生が発表会をする場などとして、機能的に使えるようにしたこと。第二体



育館棟は、1階は部室などの小部屋、2階には温水プール、3・4階に体育館という、非常に珍しい構造であること。また、校舎では木の温かみを感じられるよう木材のフローリングにしたこと。快適な学校生活を送るためには水回りも重要であると考え、トイレは清潔に、長く使ってもらえるよう配慮を施したこと。この先何代も続いていく後輩たちの姿を想像しながら設計された校舎です。

「私が昇降口の大庇に思いを込めたように、広い視野をもって羽ばたき、世界をはじめ様々な場所で、活躍してほしいですね。ときに挫折したり目指す道が変わったりすることもあるでしょう。苦しくても一歩踏み出し続ける中で、自分に合った方向が見つかり、苦難を乗り越えることに繋がると思います。自分の気持ちに嘘をついてはいけませんよ。」と優しい笑顔でエールを送って下さいました。

一高を愛し、後輩たちへの思いを校舎に託した小川氏。そんな大先輩の思いに包まれた高校生活。高校3年間は将来を描き、自分を探し、自分を鍛え、出会った仲間と語り、笑い合えるかけがえのない時間。あの日、校舎のあの場所で語り合ったこと。校舎のあの場所から見た景色。校舎が育んでくれた数々の思い出は、卒業から何年経っても色褪せることはありません。

(平成15年卒 内田 知代)

4代目白聖城で過ごした あの日の思い出

インターハイ予選敗退後間もない晴れた日。校舎2階から外を眺める。グラウンドと岩手山を見ながら、高校部活の突然の終わりを消化できず、その空虚感について仲間と何時間も語り合った。40歳の今なお、その光景を鮮明に憶えている。新校舎ならではのグラウンドと岩手山のそのタッグは、高校時代を素敵に甦らせてくれる。

(平成15年卒 川原田 圭)

温かく迎えてくれた新校舎の真新しいフローリング。だが、応援団の洗礼で背筋が凍る。「あんバター」争奪戦のために走った廊下。キラキラした白聖ホールに、数学の再試で足繫く通うことになるとは。肌寒いバルコニーで弁当を食べながら部活仲間と眺めた岩手山。今日見た姿と同じように白かった、っけ?

(平成15年卒 小笠原 聡)

5階の片隅にある吹奏楽部の部室。防音が整った、絨毯敷きの広くて綺麗な部室のお陰で、朝練・昼練・放課後練に、勉強そっちのけで没頭できました。天気のいい日は、屋上や各階のベランダでパート練。グラウンドで運動部が頑張っている姿を見ながら練習することは、我々文化部の励みになりました。

(平成15年卒 加賀 典子)

医療法人 芳譲会
渡辺内科医院
理事長 **渡邊 立夫** (昭和45年卒)
院長 **渡邊 収司** (平成12年卒)
〒028-3305
岩手県紫波郡紫波町日詰字下丸森122-3
TEL: 019-672-3667

柴田歯科医院
柴田 理 (昭和45年卒)
〒020-0878
盛岡市肴町5-5肴町中央ビル2階
TEL: 019-651-6710

昭和四十五年度卒業
硬式野球部後援会長
代表取締役
(株)駒木葬祭
駒木 進
盛岡市南大通二丁目二ノ六

医療法人
小笠原眼科クリニック
理事長
医学博士
小笠原 孝祐 (昭和45年卒)
〒020-0114
岩手県盛岡市高松3-10-12
TEL: 019-662-3223
URL <https://ogasawara-eye-clinic.or.jp/>

みちのくコカ・コーラボトリング株式会社
代表取締役会長
盛岡商工会議所会頭
谷村 邦久 (昭和41年卒)



設立百周年記念講演

応援団と自校文化の形成過程

◆はじめに・盛岡一高との出会い
 皆さま、ご紹介いただきました鳥取大学の瀬戸でございます。私は東京の出身で早稲田大学に進学し、同大学院の修士課程、博士課程を経て博士号を取得しております。専門はスポーツ人類学となります。さて、まず最初に、ちょっと個人的な話になりますが、大学に入る時に世界中のさまざまな文化(世界の広さ)を知りたいというような漠然とした希望を持っていました。そんな思いもあって、早大在学中に約30カ国を巡ることになりました。そのような中で、当時早稲田大学ではエジプト考古学が盛んに研究されていたのですが、自身の興味とも相まって私は早大エジプト学研究所に所属し、考古学や保存修復の勉強をすることになります。研究所で私が担当していたのはルクソールという地域の王家の墓所でした。当時は1年に数か月、彼の地へ出かけ毎日遺跡に行き調査研究するという夢のような時間を過ごしていました。さて、研究所には全国から優秀な先輩方が集まっておられて、その中に菊地敬夫さん(昭和56年卒)がおられました。菊地さんはいつも腰に日本手拭いを着けておられました。気になってちょっとお伺いしてみると岩手の、盛岡第一高等学校の出身であることを知ることになり、そして、この出会いが私と一高との出会いでもあったので

学され、その後留学先のカイロでドイツ語の勉強をされてハイデルベルク大学で欧州のエジプト学を学んだ優秀な方です。菊地さんはその後、エジプトのアレキサンダリアにあるエジプト日本科学技術大学で教鞭をとられるなど、私にとってはいつまでも追いつけない先輩です。さて、このような経緯で、盛岡一高の応援団について勉強させていたいただくことになりましたがその成果が『応援の人類学』という書籍の中でまとめられた次第です。日本には国立民族学博物館という文化人類学の殿堂があるのですが、当館で応援という現象を文化人類学的に研究するプロジェクトが興り、3年間かけて文化人類学や社会学の第一線の研究者とご一緒させていただき、その成果としてまとめたのがこの本に収めた論考になります。

◆応援団を研究する・その研究視点

まず、応援団という対象が果たして研究する上でどういう位置にあるのかをお話します。皆さんご存じのとおり、バンカラという言葉で応援団文化は表現されることが多く、肯定的に捉えられることももちろんですが、時にそれは「時代錯誤」などとややネガティブに見られるものもあります。それというのは、応援団が伝統的な行動様式や人間関係を大切に、それに基づく独自の世界観を護り続けていることに他ならないのですが、それによって、応援団という空間は現代と少し距離が生まれることになるからです。ただ、私にはそこが研究視座としては重要なポイントなのではないかと思っております。というのは、そこには我々が失いつつある、日本人が忘れかけている、というふうな申し上げたいところがあるかもしれません。学校という空間で紡がれた、紡ごうとしていた黎明期の文化、集合的記憶がまた繰り返していられた「昔の日本人」に会えるのではないかなんて、漠然と、不思議な気持ちもあって研究していることになりました。明治という時代を考えると、ご存じのように比較的閉鎖的であった近世が終わり明治維新を境にして外国文化が怒涛の如く流入してくるようになりました。学校という仕組みもこの時に輸入された

ものであります。このような営みの中、日本文化と外国文化がぶつかり合うこともあれば、思いの外うまく融合することもありました。うまくいった場合、西欧を是としたハイカラという文化が育まれ、その反対ではバンカラにそのアイデンティティを見つけたのかもしれない。ただ、ハイカラ、バンカラのいずれにしても現代の言葉で言えば「ハイブリッドな文化」であり、それまでになかった最新の文化の中で応援団は生まれたのではないかなんて考えているところでもあります。

さて、バンカラ文化についても少し触れますが、皆さんご存じのように、例えば「高下駄履いて腰に日本手ぬぐい」だったり、その姿・形に目が行きがちですが、彼らにとっても重要なのは、「表面の姿に惑わされない」という点だったように思います。自分たちの生き方、生き様、物事の真理追求すること、そのために敢えてそういった格好をしているとも言われます。したがって、バンカラを一言で言い表すならば、それは精神文化であり、その表象として応援団が如何に機能していたのか、そこが応援団研究のおもしろさなのではないかなんて思っています。

本日は、盛岡一高のお話をさせていただきませんが、本校は、もちろん校長先生を中心に教員の組織があり生徒さんがおられる空間ですが、同時に生徒たちも、気概をもって自分の学校、自分の時代を創り、護らなければならぬという明確な意思を持ち、いわゆる「自治」といわれる意識も高く、色濃く遺る場所です。もちろん、それらはいつの世も「先生たちの理解と協力」があって成り立つものではありますが、彼らの核には先輩たちから受け継いだバンカラ気質とその文化があり、盛岡一高を「一高足らしめている」と思っております。

さて、旧制に系譜を持つ全国の高校では、新年度が始まると、放課後に校庭や体育館、または屋上に新入生を集めて、各校に伝わる歌や応援、高校生活の心構えなどを教えることとなります。そして、この行事に職員室が直接関与しないということが重要なポイントになっており、この空間を取り仕切るのは応援団というふうな申し上げたいかと思っております。「質の濃い」練習を経て、新入生は本校の歌や応援の型を短期間で習得していきます。今申し上げましたように、日本各地で同じようなスタイルで歌練習が実践されており、研究者的には明治時代に系譜を持つ応援団文化の典型と捉えています。

さて、新入生からすると、入学後、突然、応援(団)の先輩たちが教室に入ってきて来て、急かされ教室の外に

◆校歌・応援歌練習と一高生

校歌・応援歌練習を学問・学術的な目からスポーツ人類学の範囲、枠組みにおいて少しお話しさせていただきます。私は、校歌・応援歌練習というのは、ひとつのドラマトゥルギーではないかなんて思っております。ドラマトゥルギーを簡単に説明しますと、社会というものを舞台空間に見立てて、その中で求められる役割りを人々が熟すことによつて、日常に新しいバイブルが生まれたり、それが強化されたりそういった仕掛け、劇空間の世界のことになります。そういった視点で見ると、校歌・応援歌練習というのは分かります。学校空間にとって重要な意味を持つものとして理解できるのではないかなんて考えております。



鳥取大学教育支援・国際交流推進機構准教授 瀬戸 邦弘氏

1972年、東京都保谷市(現:西東京市)生まれ
 早稲田大学人間科学部スポーツ科学科卒業、同大学院人間科学研究科修士課程、博士後期課程を経て、早大より博士(人間科学)を授与される
 専門はスポーツ人類学
 主要著書:『大学応援団という空間とその身体』『近代日本の身体表象 演じる・競う身体』(森話社2013)、『伝統という歴史空間を構築する応援団-岩手県立盛岡第一高等学校の事例から』(応援の人類学) (青弓社2020) など

さて、エジプトも含めて世界を旅し幸せな学生時代を過ごしましたが、その中でひとつだけわかったことがありました。それは、(世界中をすべて見たわけでもないのですが、世界中を隈なく旅したとしても「世界のことは分からない」という、実に当たり前のことでした。ただ、これは自分にとりたいへん大きな気づきでした。そして、ふと振り返ってみると、日本という国が魅力的で不思議な場所だということに気づかされ、そんな時に目の前に現れたのが、「応援団」という存在でした。「そう言えば菊地さんの高校って応援団の有名なところだったな」などとふと思いだしまして、菊地さん経由で盛岡一高とご縁をいただき、私の応援団研究がスタートすることになります。尚、菊地さんは早大第一文学部を卒業された後にカイロ大学に留

入して、その後留学先のカイロでドイツ語の勉強をされてハイデルベルク大学で欧州のエジプト学を学んだ優秀な方です。菊地さんはその後、エジプトのアレキサンダリアにあるエジプト日本科学技術大学で教鞭をとられるなど、私にとってはいつまでも追いつけない先輩です。さて、このような経緯で、盛岡一高の応援団について勉強させていただくことになりましたがその成果が『応援の人類学』という書籍の中でまとめられた次第です。日本には国立民族学博物館という文化人類学の殿堂があるのですが、当館で応援という現象を文化人類学的に研究するプロジェクトが興り、3年間かけて文化人類学や社会学の第一線の研究者とご一緒させていただき、その成果としてまとめたのがこの本に収めた論考になります。

さて、旧制に系譜を持つ全国の高校では、新年度が始まると、放課後に校庭や体育館、または屋上に新入生を集めて、各校に伝わる歌や応援、高校生活の心構えなどを教えることとなります。そして、この行事に職員室が直接関与しないということが重要なポイントになっており、この空間を取り仕切るのは応援団というふうな申し上げたいかと思っております。「質の濃い」練習を経て、新入生は本校の歌や応援の型を短期間で習得していきます。今申し上げましたように、日本各地で同じようなスタイルで歌練習が実践されており、研究者的には明治時代に系譜を持つ応援団文化の典型と捉えています。

さて、新入生からすると、入学後、突然、応援(団)の先輩たちが教室に入ってきて来て、急かされ教室の外に

連れ出されますが、これは物理的に連れ出されるだけでなく、高校生(一高生)という枠組みに連れ出される瞬間、実は彼らの新しい世界(高校生活)の「本当の」スタートなのかなと思っています。

以下指摘することは、どこの高校でもほぼ一緒なのですが、歌練習の時に先輩たちは一切笑顔は見せません。そして、歌練習の全ての期間が終わった時に団長が「君たちは頑張った。よくやった」ということを伝えてくれます。一高の場合、団長の声の後に、体育館の暗幕がぱっと開いて、4月の眩い光が満ち溢れる、そんな枠組みになっていますね。そして、その瞬間に初めて一高生になったというふうに入生(一高生)の皆さんがお感じになると、よく聞きます。したがって、入学するということが一高生になるところで、異なる層が存在している、重層的になっているのかなと感じるところでもあります。団長だけではなく、「質の濃い」練習の最後に、指導に当たった個々の先輩も笑顔で「おまえら、よくやったよ」「君たちは頑張ってたね」という話をしてくれます。心の籠った優しい声の言葉が溢れ出てきます。それによって新入生は「何だ、あんなに厳しくしていたのは、我々を思ってくれたのか」と初めて気が付くことになるのです。優しいというよりは、現状やこれまでの途次を認めるだけではない、その人の今後の可能性を慮る場合に、時に厳しく「世界の広さ」を教える、そんな在り方も存在するのだと、新入生は知ることになるのかもしれない。初めて出会った先輩が憎くもないし怒る対象でもないけれども、同じ学校の「先輩だから」ただそれだけですが彼らには頑張り、幸せにならなければならない、先輩たちに溢れるほど充滿しているということを知るので、新入生は、先輩から受け継がれる「一高魂」というものを共有できる「器」になるための修業を行っていたことになりま

す。歌練習を終えた時に「一高生になる」と言われるのは、実は一高生としての140年にも及ぶこの学校の名譽や重みといったものを受け止めることができる「器」の入り口にたどり着いた瞬間なのではないかと考えています。「彼らはもう伝統校の歴史の一部として歩み出せますよ」と、歌練習はそのためのドラマトゥールギーなのではないかなと思っているところなんです。一高には「一高魂」や「一高精神」といった言葉が幾つかあり、人生の節目や重要な場面です。そういった言葉が使われるかと思いますが、これらは単語の単純な文字面の意味以上に重みを持って

いるのです。140年以上前に入学された先輩から今年入学した生徒まで全ての「一高生」がこの学校に脈々と受け継がれる「魂」の継承者であり、それを共有できる人になること、この誉れという重責というものを受け止めるための準備がこの歌練習ではないかと思えます。楽しい思い出というのはすぐ忘れてしまいがちですが、大変なことというのは結構覚えていてくれるものです。皆と一緒に頑張り続けた出来事は後でセピア色になり「あの時、大変だったよなあ」というふうにならなくなって、そして支えてくれる思い出になります。みんな一つになつて頑張り、一高の仲間になっていく、そして一高という空間が居場所になっていく、歌練習はそんな通過儀礼はないかなと私には思っています。

◆大運動会・猛者踊りと一高生

普通、旧制の学校の場合、ここで通過儀礼は終わります。一高の場合には第2章があります。一高生はこのあと「猛者」になるのです。歌練習が終わって、一高の場合には5月13日の大運動会に向けて新たに始動、新入生が猛者(一高生)になるのです。

さて、大運動会は、ご存知のように不思議な選手宣誓から始まり、一高式と名の付く独特な競技のオンパレードですが、その中心にはいつも応援団が存在し、一高文化にとり重要な役割を果たす猛者が登場してきます。(現在は)赤い色と青い色に身体を彩色した新入生が猛者踊りを披露することになります。彩色だけではなく、彼らは「猛者刈り」というちょっとエキセントリックな髪型で登場します。どうも一説には、5月1日を「猛者解禁」と呼ぶよう

でそれから運動会までの約2週間、彼らは猛者への移行期に入ると考えられてもよさそうです。猛者に扮する際には腰巻を纏い、猛者棒を携え、猛者になっていく時は「ヒー」と返事をすることになりますが、私はそ

れを「猛者語」と名付けました。彼らは決してふざけているわけではなく、完全に猛者になることだと理解しています。しっかりと猛者という世界に自分たちを移入する、これも実は一高生になるための重要な通過儀礼と考えています。彼らはこの時期に猛者に移行し始めて、5月13日、一高の創立記念日に猛者になるのです。

ご存じのように、そもそも猛者踊りは「土人踊り」と呼ばれていました。昭和21年5月30日、敗戦後の活のない盛岡に活気を齎したい、何かおもしろいことを運動会でしたいという思いを持つ生徒たちが偶然耳にした南方から帰還者の歌声、南方の国の自由で力強いイメージに肖ってみんなで元気になるような踊りができたらしいと「土人踊り」が生まれたそうです。彼らは、何かふざけた思いでこの踊りを考案したのではなく、「真剣に生きるエネルギーをこの愛する盛岡という土地に、そこに住む皆さんに届けたい」ということだったようです。

さて、ご存じのように大運動会における猛者踊りでは、踊りの前に寸劇が行われます。毎年、ふたつの集団の間に何某かの問題が生まれ、ふたつの集団の領袖間に諍いが生まれます。それは集団同士の抗争に発展し、結果、みんな死んでしまうのです。その後、神様が現れて猛者たちを復活させて、平和と生命に感謝してふたつの集団はともに猛者踊りをする、大体こういう流れになっています。さて、ちょっと面白いのは、往時、神様が応援団長であり、その傘持ちが(新任の)先生だったということなんです。これは、文化人類学で言うところの「役割転倒」というものにあたるかもしれません。日常生活の秩序から一転、一時的な秩序が生まれ、応援団長を中心とした象徴的な空間が生まれることになります。この世界の中心には応援団が居て、先生は従の位置に移行します。そして応援団長が神として、すべての死する新入生に新たな生命を与え、彼らは一高生として生まれることになるのです。また、これは自治の世界における秩序の誕生を比喩的に表すことにもなるのです。そして、なによりこのストーリーでよくできているのは彼らの誕生日が、みな一高の創立記念日と同じく5月13日になるという

ことです。これを意図的に考えた人が居られて、一高の歴史というコンテキストの中にこっそり忍ばせたと思えば、その方は天才だと思います。そして、最後に再生し一高生として新たな生命を得た新入生たちは、初めて一高生として猛者踊りを踊り歌うのです。彼らは「真の」一高生になるのです。体育館に続き、2回目の陽の光が彼らを包み込むのです。大運動会というのは、ただ、紅と白どちらが勝つかだけではなく、見えな

い機能がそこにはあり、一高生としてアイデンティティを生み、強化する場所と理解できるのです。たとえば大運動会というのは、架空の「一高王国」のようなもの国民になるためのロールプレイというのか、ドラマトゥールギー的空間のクライマックスなのかもしれないと思えます。つまり、大運動会で再生産、再創造される価値は、実は日常にとっても重要なものであり、その中心に応援団がいるということが肝なのです。応援団という文化が、時に時代錯誤などと言われることもありま

すけれど、私は、先輩たちが大切にしているのと同じく、自分たちが大切にしている「昔ながら」の考え方・価値というのをしっかりと継承できているからこそ、考え方・やり方を安易にアップデートしないからこそ、自校のアイデンティティというものが受け継がれ、護られているのかなとも考えています。文化の継承というのは一般的にそういった側面を持つもので、その営みの中で自分たちのアイデンティティたる「伝統」というものは醸成されていくものなのです。

◆誰かの誇りになるために

このような考え方の肝に、私は「理外の理」というものを想定するのが一番しっくりくるのかなと考えています。私どもは、兎角、合理性と合理性とどか、日常的に、よく「理」という言葉を使いますが、それは大体外国から輸入した「理」のようです。ただ、一方で、外国からもたらされる「理」ではなく、たとえば旧制学校で真剣に外国と我が国の間で求められ受け継がれていくべき姿の、その中心にある「理」、近代日本が生み出した日本の「理」というものがひょっとしたら、この応援団を含めた伝統校の中にはまだ息づいているのではないかなと思っ

ています。欧米の「理」の外にあるけど、我々には重要な「理」もあるのかも、それがわかれば坂の上の雲を追いかけたいた明治の日本人の想いに少しだけ触れることができるかも、そんなことを考えているところなんです。世代を超えて同じような風景の中に身を置くこと、これは本当にうらやましいことであり、伝統校だけに許される「特権」なのです。

最後にちょっと余談ですが、皆さん「スネカ」はご存知だと思います。三陸町吉浜で行われる正月の来訪神習俗です。異形の来訪神が家を訪れて、子供たちにおまえら、ちゃんとやってくるか。そんなんじや幸せにならないぞ、という決して

耳障りの良くないが大切なことを伝えるに来ますが、同様の風習は東北地方に散見できます。もちろんスネカは子どもたちが憎いわけではなく、力の子どもたちが憎いわけではなく、伝えなければいけないことがある時は躊躇せず伝えるという気概みたいなものがあるように思えます。私はこの姿が、歌練習に始まる応援団の姿勢に重なって見えるのです。だからこそ岩手や東北の地方でバンカラ応援団がしっかりと受け継いでいるのかな、という気がしているところでもあります。

「優しさ」というのは何か、って難しいです。自分よりも相手のこと。それを利他と言ったりします。この考えは仏教に出てきますが、相手のために何かをする、そういった価値観は近代だけではなく近世以前の我が国の記憶が遺されているような、そんな気がしています。そして最後になりますが、校歌・



応援歌練習というのは、実は1年生だけの試練ではございません。皆さんご存じのとおり新2年生、新3年生は、学年が上がるときにめっちゃ練習すると聞きました。なぜかと言えば、新しい仲間自分たちが何かを伝えるのであれば「自分たちができなければ駄目だろ。恥ずかしいじゃないか。」という想いがあるのです。これは、自分達の見栄とかそういうものではなく、1年間の自分への答え合わせ、矜持となります。全国の応援団の方がよく言うのは、「応援するのだったら、彼らより頑張りたければ応援できない」、そういったものに繋がっているのかなと思えます。そして、OB・OGの方たちにお目にかかって感じることは、これは

在学中に限ったことではないのではないかなとも本日思っています。皆さんは、一高の卒業生としてもちろん誉れがあるのと同時に、その責任を常に感じいつも先輩とか後輩などのことを考えながら、「私も頑張りなまなま。恥ずかしくない自分になりたいな」と常に自分を律しておられるように思えます。そして、「誰かの誇りになれるように」いつも努力を重ねておられるのだと強く感じています。これが母校愛なのかと思

特集
2

新しい治療法の確立を目指して

～治療アプリ社会実装への挑戦～

すずき しん
鈴木 晋さん（平成16年卒）

慶應義塾大学医学部卒業。在学中にプログラミングを習得し、卒業後は初期臨床研修の前に東京大学医学部研究所でのゲノム解析研究助手および Web 制作会社でのエンジニアとして社会人経験を積む。2014年、治療アプリ開発会社「株式会社 CureApp」を共同創業し、現在に至るまで取締役として会社を牽引。テクノロジーの力で治療を進化させ、医療を取り巻く社会的課題を解決し、理想の医療を実現すべく、日々邁進している。

医師による治療と言えば「薬」が思い浮かびますが、薬と同じように、その効果が治験により証明された「治療用アプリ」を開発し、医療に貢献している1人の医師がいます。アプリでの治療とはどのようなものなのか、如何にしてそのような先進的なものの開発に至ったのか。興味深いプロセスについてご紹介します。

治療アプリとはどのようなものなのか

治療アプリは薬と同じようにその効果や安全性が治験を経て証明された、医師が処方するスマートフォンアプリです。医師が「処方コード」というものを処方することで初めて使えるようになります。ダウンロードすれば誰でも使うことができるヘルスケアアプリとは異なり、臨床試験や治験によって治療効果が示され、「医療機器プログラム」として国から承認を受けているもので、医療機関で治療目的に用いることができます。

行動変容をサポート

例えば、ニコチン依存症患者さんが、普段タバコを吸ったり買ったりしている場所に行かないなど「行動を変える」ことで、その衝動を抑えられるということがあります。一言で「タバコをやめる」といっても、正しい情報にアクセスして「行動を変える」ことができる人は意外と少ないです。治療用アプリは、こうして「行動を変える」ことを促し、習慣化をサポートします。

前例は、自らつくる

3回の臨床試験を経て、2020年、ニコチン依存症治療アプリ「CureApp SC」が薬事承認および保険適用となりました。これは日本およびアジアでは初めてのことでした。創業が2014年ですから、6年もかかったこととなります。創業当時は「アプリなんて承認されるはずない」と言われながらも、着実に歩みを進め、大きな成果につなげることができました。2022年には、高血圧治療補助アプリ「CureApp HT」が承認されました。資金も人員も限られたなか、ニコチン依存症治療アプリと並行して開発を進め、2年後の承認を実現できました。

現在につながる生き立ち

幼稚園～高校までは盛岡で育ちました。昔から好奇心旺盛で何かを作るのが好き、小学生のときから曲や絵本を作ったりしていました。また、数学にも早くから興味がありましたね。何が役に立つかわからないからと、何事にも好奇心を持って取り組んできました。一高生になってからは、文化祭や予餞会などのイベント、応援団関係の活動にも真剣に取り組みました。プログラミングも高校時代から学び、センター試験のBASICの問題を解けるように勉強していました。勉強の仕方をとにかく工夫、模索し、「知識人ノート」と称してなんでも覚えるためのノートを作る、暗記したいものを録音して寝ながら聞くなどしていました。作曲に没頭し、県のコンテストで最優秀賞を取ったりもしました。当時から、枠組みが決まられていない自由度の高い組織が好きでした。一高の校風が、自分にはよく合っていたように思います。

医学部入学～創業まで

大学に入ってからいっそうプログラミングにのめり込み、色々書けるようになりました。医学をプログラムで発展させるような分野、量子化学シミュレーションやゲノム解析に興味がありましたが、当時は Web アプリが流行しはじめていたので、そちらに興味に移りました。医学部を卒業して数年後、大学の先輩に誘われ、現在の会社「CureApp」を共同創業しました。

苦勞したこと、乗り越えたこと

基本的に全てが大変でした。いわばベンチャー企業ですから、仕事を誰かが



教えてくれるわけではなく、自分で内容や進め方を考えていく必要がありました。結果として、薬機法対応や情報セキュリティなど、進めてから初めてぶち当たった課題も多かったですが、その都度対応しながら会社の組織を整えていきました。

治療アプリは国の承認が必要なることもあり、世の中に出るまでに時間がかかるビジネスです。様々な関係者の納得を得ながら進める必要がありましたが、僕は、交渉が必要な場面でいわゆる「正論パンチ」をぶつけてしまうタイプで、実はこうしたことが苦手です。この点は一緒に創業した相手の社長が、周りの人を巻き込んで様々な人の協力を得ながら話を進めることが抜群にうまかったので、周囲も味方につけながら進めることができたと思います。また CureApp には、製薬会社、医療機器メーカー、Web/IT 業界、医療職などバラエティに富んだ出自の方が集まっており、それぞれ全然違う文化や考え方を持っています。これらをまとめて会社としての独自の文化を作っていくかばならず、苦勞しました。しかし振り返ると、高校時代もオリジナリティを大事にして過ごしてきたから、何かを模倣することができない状況でも、それを楽しみながら乗り越えることができたように思います。バドミントン部も新聞部も、自分たちでやり方を決めて組織文化を築いてきたことを思い出しました。

アプリが承認されることになって、創業当時は誰もできると思っていなかった地点に到達したことに改めて感慨深い気持ちになりました。途中、何度も難しい壁が立ちちはだかりましたが、一つひとつ丁寧に考えながら向き合ってきた結果、遠くまで来れたのだと思っています。

今後について

「治療アプリ」はまだ新しいものであまり認知されておらず、市場も確立されていないので、まずはその概念自体を普及させたいですね。また、今は生成 AI の時代になったので、それを取り入れていけば治療アプリも新たなフェーズに入るのではないかと思います。スマートフォンにかわるデバイスで、より自然に行動変容できるようにならないかとも考えています。

同窓生、在校生へメッセージ

振り返ると、今の自分を形成しているのは高校時代の経験が大きいと思います。これまで関わってくれたたくさんの方々に感謝しています。今回はたまたま特集として紹介していただきましたが、皆と会っている話したいという気持ちです。偉そうなことを言うつもりはないですが、治療アプリのように「絶対無理」と言われたものでも、諦めずにつねに知恵を絞って進めれば実現できることもあると思います。そういうチャレンジをしたい方、されている方には勇気をもって進んでほしいです。

〔編集後記〕 鈴木さん元来の優秀な能力や素地に、一高生活の中で育まれたパーソナリティが合わさることにより、時代に即した先進的かつ効果的な取り組みに至ったのではないかと思います。特集を担当しながら、興味深い情報にアクセスすることが出来たのは大変貴重でした。健康の自己管理は重要なので、日頃からしっかり意識していきたいものです。（平成16年卒 高橋 右）

BRIDGESTONE
Solutions for your journey

ブリヂストンタイヤ
岩手販売株式会社
代表取締役社長
高橋 瑞彦
(昭和52年卒)

岩手税理士法人

代表社員
工藤 重信 (S50卒)代表社員
高橋 淳 (S60卒)

https://iwate-tax.com

白聖四九会
お陰様で卒業50周年

昭和49年次卒業生一同

在京白聖会

会長 戸田 純 (S48卒)

事務局 伊藤 総 (S55卒)

会員約3000名で色々な活動しています

(www.hakua.org/tokyo/)

YAMAYO

代表取締役会長

高橋 良一 (昭和46年卒)

総合建設業 株式会社山興

〒020-0044

盛岡市城西町13-77

TEL: 019-653-1221

インターハイ・全国高総文祭報告

出場おめでとう

五歩 歩兵

ON AIR

剣道部

インターハイ参加報告

3年4組 橋場 円

今年の8月に大分県で行われたインターハイに参加してきました。自らの一高剣道部での活動の集大成としてこのような大舞台に立ち、試合ができたことをとても嬉しく思います。これまで自分は主要な大会で大きな結果を残したことがなく、出場が決まった時は全く実感が湧かなかったことを覚えています。

インターハイ当日、自分の実力は出し切りしましたが、やはり全国で勝ち上がる強豪校には遠く及ばず、目を見張るような結果を残すことはできませんでした。超高校級の選手たちは技術だけでなく、精神力や忍耐力などさまざまな面で優れており、また目標に向かって努力を続けている彼らの姿からは、向かうベクトルは異なりますが一高生に通じるものを感じました。最後に、ここに至るまで白聖同窓会をはじめとするたくさんの方々への援助と激励のお言葉をいただきました。自分だけの力では決して辿り着くことはできませんでした。本当にありがとうございました。



柔道部

自分の青春

3年2組 中村 悠月

「お前は負けたんぞ」この一言で柔道に対する意識が変わった。屈辱を味わい、これまでの防戦一方の柔道から一本を取る柔道へ改革しようとして決めた。具体的には部活に加えスポーツ少年団でも練習をするようにした。目標は内股一本とし毎日200本打ち込んだ。スポ少では自衛官、警察官、時には女子実業団チャンピオンも相手をしてくれ日に日に成長していくのを実感をした。練習はハードで肉体的には辛かったが、自身の成長を感じられて精神的には楽しいが勝っていた。

短い練習時間の中で効率を求め、努力し2年生には県大会並びに東北大会でも優勝し、3年生の県高総体では全試合オール一本で優勝、インターハイにも出場することができた。人より長い夏を過ごして勉強との兼ね合いから逃げ出したくなる時もあったが、自分の頑張りに呼応して周りの人が応援してくれることが何よりも支えになった。多くの周りの人に支えられ応援され目標に向かって走り続けた3年間こそ私の最高の青春であった。



登山部

土まみれの青春

3年1組 佐々木 克志

私が登山競技を始めてから、いつの間にか2年半が過ぎていました。月日の流れが早いと感じるということとは、それだけ楽しかったということだと思います。今回の大会は今まで最も入念な準備をしたと思っていて、それは顧問の先生もチームの皆さんも感じていたのだと、疑いようもないでしょう。その甲斐あって、女子は3位、男子は8位という結果を残すことができました。

私が思うに、登山競技は心が強い人しかやってはいけません。減点されたら巻き返せないし、雨が降ろうが関係ないし、テントが臭いからです。並大抵の高校生はこんなことやりにたくないでしょう。でも、その状況を乗り切る心があれば、人生きっとうまくいくと思えます。変わりゆく時代の中で、登山競技は私に一つの生き方を示してくれたように思います。デジタル化された世の中で、土まみれになって大自然の洗礼を受けられた幸せを、私は決して忘れないでしょう。幸せすぎたかもしれません。



陸上競技部

勝負の世界の厳しさ

3年6組 丹野 正知

私は、インターハイは二度目の出場となり、昨年の北海道インターハイでは三段跳で初出場ながら7位入賞であったため今年優勝を狙っていました。結果としては予選落ちとなりました。試合の日は跳躍ピットに入るまでは良い雰囲気だったもののピットに立った時には手足が震え、動悸がしていたのを覚えています。これまでに味わったことのないほどの苦痛でその日は涙が止まらず陸上をやめてしまおうかと思ったりしています。

このインターハイのために一生懸命準備してきた、怪我の不安も減らし、誰にも負けない努力をしたという自信をもっていても第三者の目に残るものは結局、結果だけです。結果よりプロセス。そんな綺麗ごととはどの分野の世界にもないと痛感しました。プロセスは個人の問題であって、結果を残さなければ意味がない、ここまで厳しい世界はあるのでしょうか。この負けを糧に、日本一を獲り、オリンピックに絶対に出場します。



全国大会を経験して感じたこと

3年3組 平野 蒼士

私は400mでインターハイに出場しました。陸上は高校から始めたため知識、技術共に乏しく3年間勉強の日々でした。各大会で設定した目標を順調に達成することができ、今回の出場へ繋がったと振り返ります。全国大会へ向けて初の東北大会にて0・03秒足りず決勝を逃した悔しさは大きな原動力になりました。

身近に高い競技力の選手がいることや他高校や大学生、社会人の選手、他校の先生と関わらせていただいた経験は私の競技力へ大きな良い影響がありました。3年間を通して本当に多くの人に助けってもらいました。一緒に練習し、応援し合った部員と指導してくださった4人の顧問の先生方には特に感謝をしています。目標達成への大きな達成感と共に練習内容を自分で考えていたことからの強い充実感を得られました。一方で運にも恵まれた出場であり、決して良い結果ではなかったため、現状に満足せず高みを目指していきたいと思えます。



代表取締役 会長
千葉 理平 (昭和 57 年卒)

BMW 正規ディーラー
MINI 正規ディーラー
株式会社モーターレン岩手
〒020-0839
盛岡市津志田南3丁目13-22
株式会社モーターレン仙台
〒983-0013
仙台市宮城野区中野字神明 98-1 2F

代表取締役社長
中谷 竜滋 (昭和 56 年卒)

盛岡日産モーター株式会社

〒020-0863
盛岡市南仙北二丁目 24-5
TEL : 019-635-1123

公認会計士
税理士
遠藤 明哲 (昭和 54 年卒)

公認会計士 遠藤明哲事務所
盛岡事務所
〒020-0807
盛岡市加賀野二丁目 7-12
TEL : 019-629-2511

東京事務所
東京都武蔵野市吉祥寺北町一丁目 4-5
TEL : 0422-21-7755

代表取締役会長
八重樫 義一郎 (昭和 49 年卒)

代表取締役社長
八重樫 政泰 (昭和 53 年卒)

経営企画部課長
八重樫 英一郎 (平成 26 年卒)

〒020-0023
岩手県盛岡市内丸 14-4
TEL : 019-654-1616

おかげさまで創業 100 周年

こうや呉服店

代表 高屋 一成

〒020-0015 盛岡市本町通り 2-14-21
Tel 019-622-2535
HP <https://kouyagofukuten.com/>

囲碁将棋部 (囲碁部門)

3年6組 大梶華子

汗と涙の全国大会
7月22日、23日に東京の日本棋院で行われた全国高校囲碁選手権全国大会に出場しました。この大会は、3年間チームを組んだ大梶華子、高橋理子、細川莉緒の3人で盛岡一高女子団体として戦う最後の試合でした。昨年は女子団体戦で7位に入賞することができたので今年3位入賞を目標に掲げ、皆で切磋琢磨し、今までになく、らい囲碁と本気で向き合いました。しかし、1回戦でまさかの負けを喫し、予選リーグ戦敗退という結果に終わりました。去年よりも確実に棋力を伸ばして臨んだ大会だったため、言葉にできない悔しさを残し、私たちの高校囲碁生活は幕を閉じました。



8月3日からは、岐阜県高山市で行われた全国高校総合文化祭囲碁部門へ県対抗団体戦に吉田恵太と大梶華子が出場しました。岩手県のチームワークの良さを発揮し、全国の囲碁仲間との交流を楽しみながら全6試合を戦いました。私の部活動生活を振り返り、良き仲間と共に嬉しい思い出も悔しい思い出も経験し、充実した2年半を過ごすことができました。今までお世話になった全ての方々に感謝いたします。

囲碁将棋部 (将棋部門)

岐阜総文を通して感じた成長

3年1組 佐々木杏葉

私は全国高等学校総合文化祭将棋部門女子団体に出場してきました。今年の全国大会では、昨年に続きベスト16という結果を残すことができませんでした。2年連続で全国の強豪たちと戦う経験を通じて、勝つことの難しさや、自分の弱点を克服するために何が必要かを深く考える機会になりました。



今年もベスト16で終わりましたが、それでもここまで来られたことは、自分や仲間たちの努力の成果だと思います。この3年間、部活動を通して培ったものは、単に将棋の技術だけでなく、仲間との絆、知識を求める探究力、そして目標に向かって努力し続けることの大切さです。これらの経験をこれからの生活にも活かしていきたいと思っています。

生物部

来年こそは3位以内の入賞を

3年7組 高橋 稀琳

8月2日〜4日に岐阜県大垣市で開催された全国高等学校総合文化祭自然科学部門に出場しました。今年連続出場10年目となる節目の年でした。ポスター発表で「岩手県の河川における附着藻類とアユの食性」研究発表生物分野で「ナガコガネグモのカプフェイン暴露による造網行動への影響 第2報」という2つの研究を発表しました。



どちらの研究グループも地道なデータ収集や数え切れないほどの仲間との議論など大会に向けて準備しました。その努力が報われ、ポスター発表で奨励賞(4〜8位相当)を受賞し、生物部として4回目となる入賞を果たしました。大会ではレベルの高い全国の高校生の発表から多くの学びを得られ、勉強になりました。また巡検研修では、日本モンキーセンターを訪れ、50種類以上700頭のサルたちを間近で観察し、ワクワクするような体験をしました。大会全体を通して、多くの刺激を受け、研究への意欲が更に高まりました。来年こそは3位以内の入賞を果たせるよう、後輩に託したいと思っています。

放送委員会

東日本震災を伝える

3年3組 古館 俐子

放送委員会は、8月2日から3日にかけて行われた全国高等学校総合文化祭放送部門のアナウンス部門、オーディオメッセージ部門に参加してきました。結果は、オーディオメッセージ部門で「伝え続けた108時間」が文部科学大臣賞(最優秀賞)をいただきました。



この作品では、東日本大震災当時のIBCラジオの生放送の様子について伝えました。当時生放送をしていた神山浩樹アナウンサーや当時のラジオ音声を使って表現しました。避難している人の名前を読み上げる放送を行っていたこと、また災害は必ず来るといふことを伝えるために編集やナレーションを工夫しました。全国の高校生にも当時の様子が伝わったように思います。また、全国の学校の作品を見たり聴いたりすることで、他の地域の魅力について知り、学ぶ機会となりました。これからも、支えてくださる方々への感謝を忘れず、取材した方や自分たちの思いが伝わるような作品を作っていきます。先生方、同窓会の皆様、本当にありがとうございました。

体操

挑戦の舞台で学んだこと

2年2組 太細 諒人
2年4組 原田 瑛翔

私達は、北九州市で行われた全国高総体体操競技大会個人の部に出場してきました。日々の練習では、試合を想定して演技を何度も確認しました。本番ではミスはあったものの、自分が今までやってきた練習を信じて堂々と演技し、全力をださることができました。一方でミスもあり、悔しさや課題が残りました。また、この大会は、自分たちの演技構成ではまだまだ全国レベルに達していないということを感じました。



今回我々が一高生として大会に出場させていたことが出来たのは、それを認めて下さいました校長先生や学校関係者の皆様、ご多忙のところ様々な手続きを行ってくださった國保先生、奨励金として我々をサポートしてくださった同窓会のご協力のおかげです。皆様、本当にありがとうございました。

少林寺拳法

自分の力を知ったインターハイ

1年3組 小野寺 奏太

私は7月末に、佐賀市のSAGAアリーナで開催された全国高総体少林寺拳法競技大会男子自由単独演武の部に出場してきました。本番では、高校生活初の舞台上に緊張してしまい、満足のいく演武をすることができず結果としてはコート8人が準決勝に進める中の10位で予選敗退という残念な結果になってしまいました。甘さ、そして全国のレベルの高さを知ることができたので、この大会を通して多くの事を学ぶことができました。



また、私がこの大会に出場することができたのは、それを認めてくださった校長先生や関係者の皆様、そしてご多忙のところ様々な手続きを、行ってくださった國保陽平先生、奨励金としてサポートしてくださいました同窓会の皆様のご協力のおかげです。本当にありがとうございました。今回の大会の悔しさをばねに次の大きな大会では、満足のいく演武、今回よりも良い成績を収められるように練習に取り組んでいきたいと思いません。

毎日新聞社

盛岡支局長 佐藤 岳幸 (昭和60年卒)

盛岡市中ノ橋通1-4-22 中ノ橋106ビル3階 TEL: 019-652-3211

昭和60年卒

高橋大 株式会社東家 専務取締役 盛岡市中ノ橋通1-8-3 019-622-2252



株式会社観光荘

取締役 佐々木 謙治 (昭和58年卒) 岩手県花巻温泉郷 台温泉 観光荘 〒025-0305 岩手県花巻市台第1地割166番地1 TEL: 0198-27-2244 http://www.kankousou.jp/

株式会社モナカ

代表取締役社長 兼 monaka 支配人 大石 仁雄 (昭和57年卒) 〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通1-6-8 TEL: 019-622-0168



昭和60年卒 松浦 政彦 歯学部士、日本口腔科学会専門員 歯科法人 徳成 デンタルスクエアもりおか青山 〒020-0133 岩手県盛岡市青山二丁目6-20 IP: http://de-horidna.com/

しっかりと噛め、にっこりと笑えるお口で、 賑やかな人生を!



3年2組 遠山 美穂

私達は2月29日から3月22日まで、ビクトリアで多くの実りある経験をしました。...

白聖の翼を通して強く感じたのは、挑戦を恐れないことの大切さです。...

引率者 加藤 弘祐

令和5年度も「白聖の翼」が実施され、一昨年度に続きカナダ・ビクトリアでの研修が行われました。...



己表現力に対する自信を高める機会ともなりました。このような貴重な経験を提供していただいた白聖同窓会の皆さまに深く感謝申し上げます。...

海外派遣「白聖の翼」報告



令和6年度 大学合格者数一覧

国立大学

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists national universities like 帯広畜産大, 北海道大, etc.

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists national universities like 横浜国立大, 新潟大, etc.

公立大学

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists public universities like 札幌医大, 青森県立保健大, etc.

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists universities like 都留文科大, 静岡県立大, etc.

私立大学

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists private universities like 岩手医科大, 東北学院大, etc.

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists universities like 芝浦工業大, 上智大, etc.

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists private universities like 帝京大, 東海大, etc.

その他

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists other institutions like 防衛医科大学校, etc.

医学部医学科

Table with 3 columns: 大学名, 現役, 過卒. Lists medical departments at various universities.

郵便料金等の改定を受け、今号より広告を掲載することになりました。...

広告掲載について

川上・吉江法律事務所

弁護士 川上 博基 (昭和61年卒) 〒020-0015 岩手県盛岡市本町通1丁目10-7



代表取締役社長 千葉 泰 (昭和60年卒) 岩手日産自動車株式会社 〒020-0837 盛岡市津志田町一丁目1-20

モダン・ジャズ

パノニカ (Morioka-Saien)

店主 浅岡 浩樹 (S60卒)

白聖同窓会創立100周年 おめでとうございます

千葉 隆史 (昭和60年卒)

ちば耳鼻咽喉科クリニック 盛岡市紺屋町2-4

恵贈 (敬称略)

- ①歌集 飛ぶ歌 一改訂版ー 飯村 良子(昭和46年卒)
歌集 光と風の五月 飯村 良子(昭和46年卒)
詩集 天の時計 一改訂版ー 飯村 良子(昭和46年卒)
句集 天の露 飯村 佳月*飯村 良子
飯村 良子 (昭和 46 年卒)
②寄付金(50,000円) 平成 13 年卒業生一同
③学徒出陣 80年目のレクイエム 還らざる学友たちへ
一橋いしぶみの会 (一橋大学)
④私の履歴書 三井住友信託銀行名誉顧問 高橋 温(昭和35年卒)著
高橋 温 (昭和 35 年卒)
⑤米内光政会会報 創刊号、第2号、第3号 米内光政会
米内光政会
⑥寄付金(436,211円) 昭和 54 年卒業生一同

昭和31年卒 昭和31年卒 昭和31年卒 昭和30年卒 昭和29年卒 昭和29年卒 昭和28年卒 昭和28年卒 昭和28年卒 昭和28年卒 昭和27年卒 昭和27年卒 昭和26年卒 昭和26年卒 昭和26年卒 昭和25年卒 昭和25年卒 昭和25年卒 昭和24年卒 昭和24年卒 昭和19年卒 昭和18年卒 昭和14年卒
吉田 豊彦 吉田 邦雄 小笠原 正明 小笠原 香子 野坂 すみ子 青山 良一郎 伊五澤 ヨシミ 諏訪 俊男 齋藤 香代子 石崎 洋志 長岡 洋介 千葉 修司 吉田 実剛 大和田 圭三郎 伊東 澈夫 瀬野 剛一 菅野 善一 兼田 敬之助 諏訪 豊治 太田 甲作 中村 信一 晴山 宗彦 佐藤 宗彦
旧職員 昭和55年卒 昭和54年卒 昭和52年卒 昭和51年卒 昭和48年卒 昭和48年卒 昭和48年卒 昭和48年卒 昭和45年卒 昭和44年卒 昭和41年卒 昭和40年卒 昭和38年卒 昭和38年卒 昭和37年卒 昭和37年卒 昭和37年卒 昭和37年卒 昭和36年卒 昭和33年卒 昭和32年卒
増子 恭一 佐々木 昌洋 小宮 祥啓 松岡 啓一 沼田 基潔 中川 夫 佐藤 実 佐々木 明 咲山 彦 佐藤 人 山目 昭 泉館 見 吉田 明 豊田 直 熊谷 夫 吉田 正 似内 利史 昆野 博章 池野 博文 澤田 光 平野 之 遠藤 朗也

心からご冥福をお祈りいたします。(令和5年11月1日以降逝去され、令和6年10月31日までに事務局にご連絡いただいた方々です。)

白聖同窓会 WEB ページ

hakua-dousoukai.jp

同窓会の活動を多くの会員に知っていただき、会員相互の交流に役立てたいという趣旨で、平成31年3月31日に開設しました。ぜひご利用願います。



Facebook アカウント 白聖同窓会
X アカウント 白聖同窓会

白聖記念館来館者

白聖記念館来館の折には、ぜひ記帳をお願いいたします。

昭和54年卒 昭和52年卒 昭和51年卒 昭和49年卒 昭和47年卒 昭和47年卒 昭和45年卒 昭和44年卒 昭和44年卒 昭和44年卒 昭和42年卒 昭和41年卒 昭和41年卒 昭和39年卒 昭和38年卒 昭和38年卒 昭和35年卒 昭和33年卒 昭和32年卒 昭和29年卒 昭和27年卒 昭和27年卒
斎藤 正義 高村 由三 高橋 修三 南郷 成雄 山本 秀紀 木村 英紀 岩澤 新治 西川 良治 滑川 政夫 滑川 政夫 煙山 清隆 阿部 清邦 小笠原 清邦 谷村 江村 大坂 早坂 佐藤 佐藤 佐藤 工藤 工藤 國分 田中 高橋 清水 吉田 敏欣



令和5年11月1日~令和6年10月31日の間に記念館に来館された方々です。

会費納入のお願い

白聖同窓会会費の納入につきまして、東日本大震災以降年間5000円を下回る状況が続いております。納入いただいた会費は、会報に掲載しております決算書の通り、同窓生相互の交流を目的とした事業に加え、全国大会や東北大会に出場する部や個人に対する部活動奨励費を始めとし、現役の一高生育成支援にも有効に活用させていただきます。

事務局から

令和7年度総会案内

- ◎期日 令和7年10月18日(土)
◎場所 ホテルメトロポリタン 盛岡ニューウイング
◎主管 平成11年卒業生一同

在校生の部活動記録について

経費削減のため、今号からページ数を削減しました。そのため、在校生の部活動記録は、WEB上で公開することに變更いたします。左の二次元コードをご覧ください。



◎音楽部が第77回全日本合唱コンクール全国大会で金賞を受賞しました。(令和6年10月26日 埼玉県ソニックシティ 大ホール)

『白聖通信』第44号編集委員

編集委員 (◎委員長 ○副委員長)

◎内田 知代(平成15年卒)

○小笠原 聡(平成15年卒)

○加賀 典子(平成15年卒)

○川原田 圭(平成15年卒)

○高橋 右(平成16年卒)

○菅原 糸織(平成16年卒)

常任幹事

内山 篤美(昭和49年卒)

谷地 勝(平成元年卒)

城守 まゆみ(平成3年卒)

同窓会事務局

副校長 佐藤 宣昌

副校長 高橋 健(平成3年卒)

学校職員 清武 英司(昭和57年卒)

山岸 千人(昭和62年卒)

酒井 朋聡(平成2年卒)

國保 陽平(平成17年卒)

土谷 桃子(平成19年卒)

石田 海(平成22年卒)

同窓会事務職員

吉田 美保子

太鼓マークデザイン 福田 隆(昭和10年卒)

製作・川口印刷工業株式会社